

ウ・トヤ『モンゴル古代書籍史』 (Ü. Tuyaγ_a. *Mongyol erten-ü nom bičig-ün teüke*)

ミャンガート・エルデムト

2008年7月、中国・内モンゴル社会科学院のウ・トヤ氏の著作『モンゴル古代書籍史』(*Mongyol erten-ü nom bičig-ün teüke*)が、内モンゴル人民出版社から出版された。本書は、中国で出版されたモンゴル古代書籍史に関する最初の研究作品として研究者の間で広く注目を浴びている。

以下、評者自身の理解に基づきながら、いくつかの点から本書の概要ならびに著者のモンゴル書籍史関連の研究経歴を紹介しつつ、さらに本書の研究史上の意義と特徴等について紹介したい。

1.

本書は、モンゴル文字で記された最初の文献が発見された13世紀から1949年までの数百年に及ぶモンゴル人の書籍史について論じたものである。

本書の内容は、「序文」、「序論」と「終わりに」を除く全12章の構成である。「序文」は内モンゴル社会科学院歴史研究所研究員のチョイジ(Čoyiji)氏による。

本論である12章の具体的内容としては、モンゴル書籍の起源、素材、作り方、形式と修飾、発展過程、分類、具体的事例、散逸と所蔵の状況、目録、種類と形式、書籍編纂の基本的特徴といったモンゴル

古代書籍史の内容をもれなく記載した高度な完結性に富む著作と評価できる。以下、各章の内容を具体的にみてみよう。

序論では、書籍に関する総論、モンゴルの書籍とその特徴、モンゴルの書籍に関する先行研究を提示している。

第一章「モンゴルの書籍の起源」では、モンゴル人の言語、モンゴル文字の起源とモンゴルの書籍の誕生、モンゴル古代の書籍の発展状況などについて論じた。

第二章の「モンゴル古代の書籍の素材」では、石に書かれた書、金銀銅に書かれた書、白樺皮に書かれた書、壁に書かれた書、玉に書かれた書、絹と布に書かれた書、皮に書かれた書、骨に書かれた書、木に書かれた書、紙に書かれた書といったモンゴル古代の書籍の素材を種類別に論じ、さらにモンゴル人の製紙について具体的に考察している。

第三章「モンゴルの書籍の作り方—書写による方法」では、書籍の道具、九宝(金、銀、珊瑚、真珠、トルコ石、ラピスラズリ、東珠、銅、鋼)による書籍製作、写字者、写本のつくり方などの内容を取り扱った。

第四章「モンゴルの書籍の作り方—版による方法」では、木版、青銅版、銅版、石版、活字版などの内容を紹介している。

第五章「モンゴル古代の書籍の形式と

修飾」では、モンゴル古代の書籍の形式とモンゴルの書籍の修飾について説明している。

第六章「モンゴル古代の書籍出版の発展過程」では、元朝時代のモンゴルの書籍出版、北元時代のモンゴル書籍出版、清朝時代のモンゴル書籍出版、中華民国時代のモンゴル書籍出版といったモンゴル古代の書籍出版の発展過程を具体的に論じている。

第七章「モンゴル古代の書籍の分類および内容構成」では、モンゴル古代の書籍を歴史、言語、文学、天文暦法、医学、哲学、道徳、政治、法律、軍事、教育、仏教などに分類し、その内容を論じている。

第八章「モンゴル古代最大の書籍—『カンギュール（仏説部）』と『テンギュール』（論疏部）」では、『カンギュール』と『テンギュール』の歴史的伝統、元朝時代の『カンギュール』と『テンギュール』の翻訳、北元時代の『カンギュール』のモンゴル語全訳事業、清朝時代のモンゴル語訳『カンギュール』・『テンギュール』の刊行などの内容を論じ、モンゴル語の『カンギュール』と『テンギュール』はモンゴル古代書籍の大切な遺産であることを説明している。

第九章「モンゴル古代の書籍の散逸と収蔵の歴史的状況」では、モンゴルの書籍の散逸とモンゴル古代書籍の収蔵の歴史を具体的に論じている。

第十章「モンゴル書籍の伝統的目録」では、印経院の目録、個人所蔵書籍の目録、『カンギュール』・『テンギュール』のモン

ゴル語目録、高僧文集目録およびその他の目録について説明している。

第十一章「モンゴル古代の書籍の文字の種類と形式」では、モンゴル古代の書籍にみえる文字の種類、モンゴル書籍に併記された他民族の文字、モンゴル古代の書籍の文字の形式を論じている。

第十二章「モンゴル古代の書籍編纂法の基本的特徴」では、書名、帰敬偈と序文の習俗、跋文の習俗、校訂の習俗などを説明している。

上述した内容構成から、本書が、元朝時代から中華民国時代までの数百年という幅広い時代にわたるモンゴル書籍史の概括であり、多方面にわたる豊富な内容を含む特徴が見て取れる。この点からみて、本書は中国のモンゴル古代書籍史研究における新たな研究の切り口として注目を浴びることには疑いの余地もない。

2.

著者であるウ・トヤ氏は20世紀90年代から今日に至るまで、モンゴル書籍史に関する数多くの研究実績を挙げてきた。モンゴル古代書籍出版事業に関する論文には、「国際的にみるモンゴル古代書籍の収集状況」（*Öbör mongγol-un neyigem-ün sinjilekü uqayan*, 1997-6；『蒙古学信息』1999-2,3）、「13～19世紀到北京で出版された木版」（*Öbör mongγol-un neyigem-ün sinjilekü uqayan*, 1999-6）、「元朝時代のモンゴル出版物に関する概観」（*Öbör mongγol-un neyigem-ün sinjilekü uqayan*, 2001-4）、「ブリヤトのチクル僧院のシレート・T・ガルサ

ンジャムバとモンゴル書籍出版事業」(*Öbör mongyol-ün neyigem-un sinjilekü uqayan*, 2004-3)、「19世紀におけるブリヤトの仏書の出版について」(*Mongyol kele udq_a jokiyal*, 2004-4; *Öbör mongyol-un neyigem-ün sinjilekü uqayan*, 2004-3)、「清朝時代における嵩祝寺の出版事業について」(*Dumdadu ulus-un mongyol sudulul*, 2006-5)、「西洋におけるキリスト教者のモンゴル出版事業について」(*Dumdadu ulus-un mongyol sudulul*, 2008-4)などがあり、さらに『モンゴル出版史』(内モンゴル人民出版社、2009年)の執筆者として加わっている。また、中国の国家レベルあるいは内モンゴル自治区レベルのプロジェクトに参加した経験をもっている。例えば、『中国モンゴル古籍総目録 (*Dumdadu ulus-un erten-ü mongyol nom bičig-ün yerüngkei yarčay*)』(北京図書館出版社、1999年)、『中国モンゴル学概論 (*Dumdadu ulus-un mongyol sudulul-un toyimu*)』(遼寧民族出版社、2002年)、『モンゴル・カンギュール・テンギュール目録 (*Mongyol yanjuur danjuur-un yarčay*)』(遠方出版社、2002年)、『モンゴル学通典・新聞出版卷 (*Mongyol sudulul-un nebterkei toli -- sonin medege keblel-ün boti*)』(内モンゴル人民出版社、2004年)などに参加した。同時に、著者は中国各地の図書館に所蔵されている数多くのモンゴル古籍を自ら調査した経験もある。

このような著者の学術活動の根底には、数十年前からモンゴルの古籍に関連する仕事に携わる中で獲得した豊富な経験が

ある。著者が勤務する内モンゴル社会科学院の図書館に所蔵されているモンゴル古籍は、質量ともに世界屈指の内容を誇る重要な古籍コレクションをなしている。著者の内モンゴル社会科学院の図書館での長期にわたる職務経験と、中国各地の図書館が所蔵するモンゴル語古籍の探求活動があつてこそ、われわれはモンゴル古籍の所蔵状況に関する詳しい情報を手にできたものと考えられる。

以上の点からみれば、本書は著者による何十年もの歳月に及ぶ調査や職務経験による研究成果に基づくモンゴル古代書籍史の一大集成であるといっても過言ではない。

3.

本書は、中国初のモンゴル古代書籍史に関連する出版物であることは確かであるが、著者自身がすでに十年近く前に『国際モンゴル研究概論 (*Olan ulus-un mongyol sudulul-un toyimu*)』(内モンゴル文化出版社、1999年)において、諸外国でなされたモンゴル書籍史研究を紹介しているように、この分野の研究は国際的にはかなり早くから開始されている。

たとえば、ドイツのハイシッヒはすでに1950年代に名著『モンゴル語の北京版ラマ教版本』(W. Heissig, *Die Pekinger lamaistischen Blockdrucke in mongolischer Sprache : Materialien zur mongolischen Literaturgeschichte*. Göttinger asiatische Forschungen; Bd. 2. Wiesbaden, 1954.)を世に問い、さらに『モンゴルの家族史・教会史』(W. Heissig, *Die Familien- und*

Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen.
Tl. 1, 2. Asiatische Forschungen; Bd. 5, 16.
Wiesbaden, 1959, 1965.) では仏典以外の古
籍の研究をおこなった。さらにハイシヒ
がイギリスのボーデンとともに編纂したデ
ンマーク王立図書館のモンゴル書目にも、
モンゴル語古籍の形態を論じた記述がある
(*Catalogue of Mongol books, manuscripts
and xylographs*. Copenhagen, 1971)。ハン
ガリーのカラは旧ソ連時代にレニングラ
ード（現サンクトペテルブルク）のソ連
科学アカデミー東洋学研究所レニングラ
ード支所図書館の蔵書から得た知見を十
分に生かして『モンゴル遊牧民の書籍』
(D. Kara. *Knigi mongol'skikh kochevnikov*.
Moskva, 1972.) を著した。モンゴルの
シュゲルはモンゴル国に所蔵される木版
本を精査し『モンゴル人の出版術』(Ts.
Shüger. *Mongolchuudyn nom kevedeg
arga*. Ulaanbaatar, 1976.) と『モンゴル人
の木版書籍』(Ts. Shüger. *Mongol modon
baryn nom*. Ulaanbaatar, 1991, 改訂第2版
2002.) を刊行した。その他にも、同じ
くモンゴルのツェツェン『モンゴル人の
書籍』(Zh. Tsetsen. *Mongolchuudyn nom*.
Ulaanbaatar, 1999.) など、多くの論文や
著作が発表されている。

本書は上述の各先行研究の成果を十分
に踏まえ、かつ自らの勤務経験から得ら
れた知識に基づきつつ、各先行研究をま
た一段と完全なものにまで仕上げたと考
えられる。

4.

長い間モンゴル人は数多くの書籍文化

を蓄積してきたが、残念ながらこの問題
に関する理論的研究はまだ不足な現状に
ある。その点で、本書はモンゴル書籍文
化にかかわる問題点のある程度理論的に
研究し、モンゴル書籍史研究の発展に重
大な意義をもつと考えられる。著者は第
二章では、文献学の視点からモンゴル古
代書籍の素材を石に書かれた書、金銀銅
に書かれた書、白樺皮に書かれた書、壁
に書かれた書、玉に書かれた書、絹と布
に書かれた書、皮に書かれた書、骨に書
かれた書、木に書かれた書、紙に書かれ
た書など十種類に分類し、また第三章で
は、モンゴル書籍の作り方を転写と製版
の二分野に分け、製版を木版、青銅版、
銅版、石版、活字版と五種類に分けた。
また、第六章では、モンゴル古代書籍の
発展段階を元朝時代のモンゴル書籍、北
元時代のモンゴル書籍、清朝時代のモン
ゴル書籍、中華民国時代のモンゴル書籍
と四階段に分類し、第七章では、モンゴ
ル古代書籍の種類および内容構成を歴史、
言語、文学、天文暦法、医学、哲学、道徳、
政治、法律、軍事、教育、仏教など十種
類に分類した。さらに、第十章では、モン
ゴル語書籍の伝統的な目録を印経院目
録、個人蔵書目録、『カンギュール』・『テ
ンギュール』のモンゴル語目録、高僧文
集目録の六種類に、第十一章では、モン
ゴル古代書籍文字の種類をウイグル式モ
ンゴル文字、バクバ文字、アリガリ文字、
トド文字、ソヨンボ文字、ワギンダラ文
字など七種類にそれぞれ分類した。

本書は文献学の理論に基づくモンゴル
古代書籍史に関する研究の集成として、

モンゴル古代書籍の発展の歴史、その特徴と規律およびモンゴル人の書籍の作成方法などを理解する上で理論的枠組みを提供する役割をもっている。世界各地の文献所蔵機関には大量のモンゴル語書籍が所蔵されているものの、文献学の視点に立った系統的な研究は甚だ少ないように思われる。その意味で、本書は大学の学部生や大学院生をはじめとする幅広い研究者にとって、モンゴル書籍史に関する理解を深めるうえで欠かせない教科書になるに違いないだろう。

5.

いうまでもなく、本書の中には疑問に思われる点がないわけではない。例えば、世界のモンゴル学界では、北元時代を慣習的にモンゴル語で *umaratu yuwan* (北の元) と表現するが、本書の中では全て *qoyitu yuwan* (後の元) と表現している。国際モンゴル学においてすでに定着された用語を自分独自の表現で示すことはよいのだが、その場合の説明が見られない。また、第七章では、仏教典籍をモンゴル古籍の一種類として分類している一方で、キリスト教やシャマニズムなど他の宗教の書籍が取り上げられていない。このことから、仏教以外の宗教の典籍がモンゴル古籍に含まれないかのような勘違いを読者に与える可能性がある。さらに、モンゴル書籍の作り方を *γar-iyar bičijü bütügekü ni* (手で書いて作ること) や *bar keblel-ün arγ_a-bar bütügekü ni* (木版の方法で作ること) と二つの類型に分類しているが、実はモンゴル語としては *qayulqu*

arγ_a (書写法) や *barlaqu arγ_a* (印刷法) などの最も適切な用語使用を心掛けたほうが良かったように思われる。

しかし、このような点が本書のもつ学術的意義を低めることはなく、モンゴル書籍史研究においてなお重大な意義と価値を有する極めて重要な書物であることは明らかである。

Ü. Tuyaγ_a (ウ・トヤ) 著

Mongyol erten-ü nom bičig-ün teüke (『モンゴル古代書籍史』)

ISBN: 978-7-204-09481-3

488 P

Kökeqota : Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy_a (フフホト：内モンゴル人民出版社), 2008.

(MINGGAD Erdemtu)